

合板用素材の需給に関する経済地理学的検討

○嶋瀬 拓也（森林総研北海道）

はじめに

わが国の合板用素材供給量に占める国産材の比率は近年急激に高まっているが、従来外材を用いていた港湾工場が国産材利用を拡大させているだけでなく、内陸部に工場を建設する例もみられる（嶋瀬，2012）。そこで本研究では、国産材集荷圏の変化動向の分析を通じて、合板工場にみられる立地変動の要因を検討した。

研究方法

国産材集荷圏は、国産材素材の調達価格が外材素材より低くなる地域と仮定した。北洋カラマツ丸太の価格は、2001年以前が製材用、2002年以降が合単板用となっているため、1990年、2000年、2002年、2010年の4時点について集荷圏を求めた。外材素材価格は工場ごとに一定とし、国産材素材価格は工場からの道のりに応じて運賃部分が上昇するものとした。素材価格のデータには農林水産省統計部「木材価格」と林野庁「素材生産費等調査報告書」を用いた。また、トラック運賃は入江（2010）をもとに設定した。

結果

2002年までは、スギの価格は北洋カラマツの価格をほぼ常に上回っており、集荷圏は存在しなかった。他方、国産カラマツは、1990年の時点ですでに北洋カラマツ（製材用）との間に大きな価格差があり、2002年の集荷圏は半径約130kmと推定された。2010年になると、北洋カラマツの高騰により、国産材の優位性が一挙に高まった。特にスギは、北洋カラマツの価格が上昇する中で下落が進んだことから価格差が拡大し、集荷圏は約250kmとなった。国産カラマツの集荷圏は約280kmに拡大した。

考察

今日、北洋カラマツの価格は高い水準にあり、これより価格が低くありさえすれば合板用材として利用可能ということには必ずしもならないが、外材に対する国産材の優位性が高まっていることは事実であり、外材を利用するならば明らかに不利な内陸部に工場が建設される要因になっていると考えられた。

引用文献

- (1) 嶋瀬拓也「国内合板工業における国産材利用の拡大と工場の立地変動—2000年から2011年にかけて合板工場から木材輸入港までの距離に生じた変化—」『北方森林研究』Vol. 60, 2012年, 81～84頁
- (2) 入江賢治「山元からの運搬コスト縮減について」『林野庁専攻科課題研究』Vol. 49, 2010年, 11～20頁

(連絡先：嶋瀬 拓也　shimase@affrc.go.jp)